

令和7年秋 大学院医学薬学府学位記伝達式 学府長式辞

修了生の皆さん、学位取得、誠におめでとうございます。また、これまで皆様を支えてこられたご家族の皆様、そして関係者の方々へ、医学薬学府の教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。皆さんが努力と研鑽を重ね、立派な学位論文をまとめられたことに、敬意を表したいと思います。

皆さんは、これから大学などで研究を続けたり、臨床医として働く、あるいは企業で働くなど、いろいろな進路を取られると思います。これからどのようなキャリアを積まれていくのにかかわらず、皆さんが、大学院でいろいろな問題を解決しながら研究を進め、その成果をまとめて学会や論文として発表してきた力は役に立つと確信しています。

さて、博士課程の皆さんはまだコロナ禍の混乱の中で、修士課程の方も、まだ影響が残っている中で入学されたものと思います。一方で、2022年11月にChatGPTが一般公開され、世界に衝撃を与え、LLMを含むAIが急速に日常生活や研究に浸透した期間でもありました。皆さんの大学院での研究の中でも、直接・間接にAIを使うことがどんどん多くなってきたのではと思います。他にも多くの予期できなかったことが同時に起こりました。今は急速な変革の時期にあると感じます。皆さんも、これから仕事や研究がどう変わっていくのか不安に感じることもあるかもしれません。「AIに出来なくて、人にしか出来ないこと」は何か、と考えることもあるでしょう。もちろんAIの進歩は予測がつかませんが、大学院の間に皆さんが習得したスキルと好奇心は、AIがどれだけ進歩しても必ず活きると私が考える根拠となるエピソードを紹介したいと思います。

私は循環器内科医ですが、循環器の薬の中で最もその位置づけが変わったものとして印象深いのが β 遮断薬です。私が学生の時には、 β 遮断薬は心臓の収縮力を抑制することから、心不全には禁忌と習いました。ところが今は慢性心不全治療の中心を担う標準治療薬です。この β 遮断薬を心不全に使うことを最初に報告したのが、スウェーデンのFinn Waagsteinです。彼は、頻拍を示す慢性心不全患者に、心拍数コントロールの目的で β 遮断薬を投与したところ、心拍数の低下と並行して肺うっ血が急速に改善することを経験し、当時は禁忌とされていた β 遮断薬を慢性心不全の治療に使うことを思い立ちます。そして、頻拍を示す心筋症患者に β 遮断薬をゆっくり漸増投与することで改善が得られた7例の症例報告を1975年にBritish Heart Journalに発表しています。完全に常識に反した論文なので発表までにも苦労があり、発表後も強烈な批判を浴び

たそうです。研究費を獲得するのも極めて難しかったそうです。それでも Waagstein は目の前の心不全患者の臨床状態が改善するという事実から信念を曲げずに研究を続け、1989 年、1993 年に拡張型心筋症に関する臨床研究論文を報告。これをきっかけに大規模ランダム化比較試験が行われ β 遮断薬の効果が確証されていきました。Waagstein 自身の言葉を借りれば、「心不全への β 遮断薬の受容に 25 年を要した」のです。今日私たちが β 遮断薬を当たり前に見えるのは、彼の好奇心と臨床観察とに基づく気づき、経験による信念、そして慎重な検証の賜だと思います。

いくつかの AI に「1975 年当時の知見だけで、 β 遮断薬を慢性心不全治療に用いることを推奨できるか」と聞いたところ、全ての AI が仮説としては提案できると答えます。では、AI に答えを教えてもらったとして、それを 25 年かけて検証する信念は得られるでしょうか？禁忌とされた治療法を試すという決断、そして批判に耐えて検証を続ける信念は、人間の好奇心と観察力、そして直接的な経験から生まれるものではないでしょうか？

これから皆さんには、どのような仕事をしていても、日常的にいろいろな気づきや疑問が出てくると思います。問題を見つけ、その仕組みや改善に関する仮説を立て、粘り強く検証し、形にしていくことが、大学院で培った皆さんの力です。その力を存分に発揮し、皆さんが世界の様々な場で大いに活躍されることを心より祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

2025 年 9 月 26 日

千葉大学大学院医学薬学府長 眞鍋一郎

